

Title	保育学生の自己成長援助モデルの構築：動機づけ理論に基づく検討
Sub Title	
Author	金子, 智昭(Kaneko, Tomoaki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.90 (2021. ) ,p.87- 91
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2019年度博士課程研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000090-0087">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000090-0087</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 保育学生の自己成長援助モデルの構築 —動機づけ理論に基づく検討—

金子智昭

### 1. 本研究の目的

近年、保育者の専門性を向上させるべく、養成段階から自ら成長する保育者という視点を持った養成教育が求められている（保育士養成協議会，2014）。また、養成校の実習教育においても、保育学生の自己成長感を重視した実習指導を展開することが必要とされている（保育士養成協議会，2015）。保育学生が養成期間を通じて、専門的な理論と技術を修得し、保育者として成長を遂げていくプロセスには、学生の動機づけが関与しているに違いない。そこで本研究では、筆者が所属する保育者養成校のカリキュラムにおいて、学生の保育者としての成長プロセスを促すための「自己成長援助モデル」（Figure 1）を動機づけ理論の観点から検証し、その知見を提言することを目的とする。

Figure 1では、学生は「養成校」（マイクロティーチング、地域連携授業）と「実習園」（幼稚園実習）という学習・教育環境下のカリキュラムの基で、保育者としての専門性を高めていくが、その教育成果を左右する要因には、「動機づけ要因」（ワーク・エンゲイジメント、保育者効力感、課題価値）と「動機づけ以外の要因」（協同作業認識）が関与していることが想定されている。保育者養成校の立場から、保育科学生のあらゆる個人差を考慮に入れながら、如何に保育者として専門性を向上させることができるのか、その教育支援の在り方や方向性を追究する。なお、研究1ではマイクロティーチング、研究2では地域連携授業、研究3では幼稚園実習の各観点から検討する。

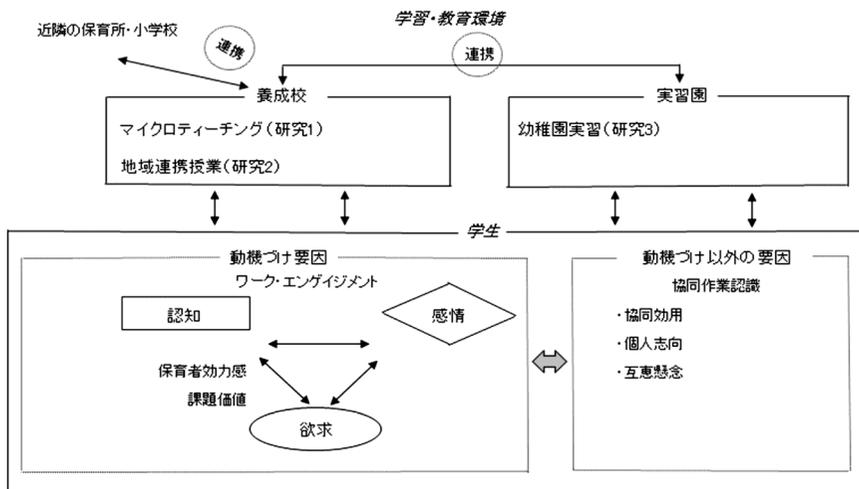


Figure 1 保育者養成校における自己成長援助モデル

注：本モデルは、筆者が所属する研究対象校のカリキュラムに合わせて作成した。

## 2. 本研究の成果

### 研究1 保育学生におけるマイクロティーチングの学習効果に及ぼす協同作業認識と課題価値の影響—交互作用および個別学習との比較に着目して—

#### 要旨

保育者養成課程において、マイクロティーチング（MT）を導入することの有効性が明らかとなっている。しかし、MTがどのような学生にも効果をもたらす最適な教授法とは言い切れず、MTの効果に影響を及ぼす学生の心理的変数も含めて検討する必要がある。本研究の目的は、学生の協同作業認識と課題価値の2つの認知変数がMTの学習効果に及ぼす影響性を、変数間の交互作用および個別学習との比較を考慮して検討することである。埼玉県内の保育者養成系の女子短期大学に在籍する1年生4クラスの学生127名（Aクラス32名、Bクラス32名、Cクラス32名、Dクラス31名、平均年齢18.56歳、 $SD=1.47$ ）を対象に、質問紙調査を2回実施した。その結果、協同作業認識について、個人志向・互恵懸念は指導案作成のメタ認知に負の影響、協同効用はメタ認知とMTの学習効果に正の影響を与えていた。また、課題価値について、興味・獲得価値は指導案作成のメタ認知に正の影響、利用価値はメタ認知とMTの学習効果に正の影響を与えていた。交互作用について、①個人志向・互恵懸念が高い学生において、コストは指導案作成のメタ認知やMTの学習効果に正の影響を与えること（Figure 2）、②協同効用が高い学生において、利用価値が指導案作成のメタ認知に及ぼす正の影響性がより強くなること（Figure 3）、が示された。MTの学習効果と学生の心理変数との関連性が示され、MTの有効な実践方法が考察された。

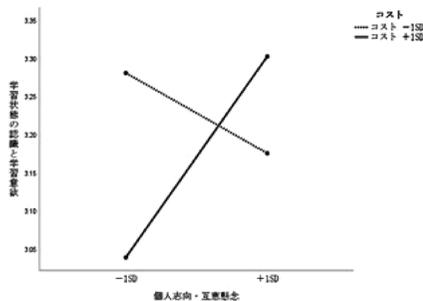


Figure 2 簡易型MTの学習状態の認識と学習意欲に及ぼす個人志向・互恵懸念とコストの交互作用

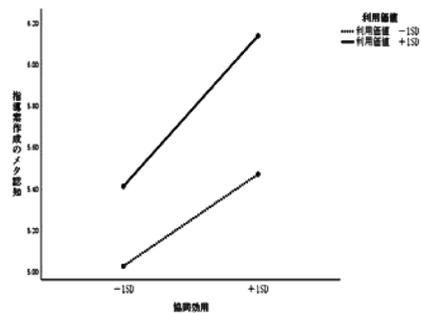


Figure 3 指導案作成のメタ認知に及ぼす協同効用と利用価値の交互作用

### 研究2 保育者養成校における地域連携授業の学習効果に及ぼす協同作業認識と課題価値の影響—交互作用に着目して—

#### 要旨

近年、大学は地域や社会の知的拠点として、地域と協働する「開かれた大学づくり」が求められている（文科省、2016）。本研究における地域連携授業とは、こうした大学が実践する地域との結びつきを大切にされた教育活動の一環であり、「保育者養成校が近隣の幼稚園、保育所、小学校などの教育・福祉機関と協力し、保育学生が乳幼児や児童など低年齢の子どもたちとの交流活動を通じて、保育者としての基礎的な資質を育むことを目指した授業」と定義される。本研究の目的は、保育学生の協同作業認識

と課題価値が地域連携授業の学習効果に及ぼす影響を、交互作用に着目して検討することである。埼玉県内の保育者養成系の女子短期大学に在籍する1年生131名（A組からD組の4クラス）を対象に、2018年の6月から7月にかけて質問紙調査を行った。個人志向・互恵懸念は保育職の志望度に負の影響を与え、協同効用は正の影響を与えていた。一方、興味・獲得価値、利用価値、努力コストは、授業の学習効果に正の影響を与えていた。さらに、個人志向・互恵懸念が高い学生と協同効用が高い学生において、努力コストは学習効果に比較的強い正の影響を与えていた（Figure 4）。また協同効用が低い学生において、機会コストは学習効果に比較的強い負の影響を与えていた（Figure 5）。地域連携授業の学習効果と学生の心理変数との関連性が示され、地域連携授業の有効な実践方法が考察された。

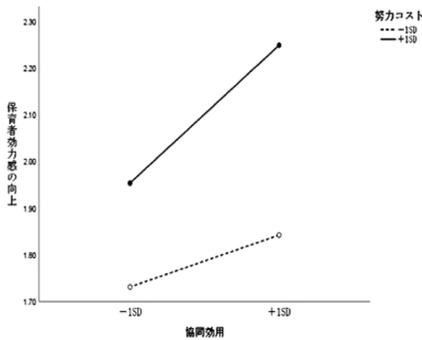


Figure 4 保育者効力感の向上に及ぼす協同作用と努力コストの交互作用

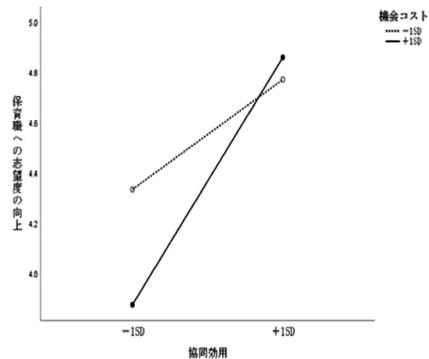


Figure 5 保育職への志望度の向上に及ぼす協同作用と機会コストの交互作用

### 研究3 保育実習生のワーク・エンゲイジメントに関する研究—JD-Rモデルに基づくコーピング仮説の検証—

#### 要旨

金子（2017）は、保育実習生にワーク・エンゲイジメントの仕事資源—要求度（JD-R）モデルを適用し、動機づけプロセスのモデルを検証した。本研究の目的は、JD-Rモデルのコーピング仮説を検証することである。コーピング仮説とは、仕事資源と個人資源は、特に仕事要求度が高い場合に、ワーク・エンゲイジメントの促進に大きく寄与するという仮説を意味する（Bakker, Hakanen, Demerouti, & Xanthopoulou, 2007）。この仮説に基づくと、保育実習生が実習中に強い困難度（仕事要求度）を認識した際、仕事資源としての指導教諭の指導スタイル及び個人資源としての保育職の適性感と保育者効力感、ワーク・エンゲイジメントを促進すると予想される。埼玉県内の保育者養成系の女子短期大学生258名（1年生（観察実習）：132名、2年生（指導実習）：126名）を対象に、2016年の5月から9月にかけて質問紙調査を行った。学年別に、ワーク・エンゲイジメントを従属変数、センタリング処理を行った6つの変数（指導教諭の指導スタイル、保育職の適性感、保育者効力感、実習記録、幼児指導、幼児との接触法）を独立変数とする階層的重回帰分析を行った。第1ステップに仕事資源もしくは個人資源の1変数と仕事要求度の1変数、第2ステップに各々の変数の交互作用項を投入して、回帰分析を行った。交互作用が有意であったのは、1年生の保育職の適性感と幼児指導（ $\beta=.25, p<.05$ ）、1年生の保育者効力感と幼児との接触法（ $\beta=.26, p<.05$ ）の2つであった。さらに、交互作用がみられた変数に

関して、Aiken & West (1991) の手順に基づき、単純傾斜検定を行った。その結果、幼児指導の困難度が高い場合の保育職の適性感 ( $\beta=.40, p<.01$ ) と幼児との接触法が高い場合の保育者効力感の影響 ( $\beta=.26, p<.05$ ) が有意であった。保育職の適性感と保育者効力感とは、ワーク・エンゲイジメントや実習成果を高めるだけでなく(金子, 2017)、実習生が幼児との関わりに強い困難感を抱いた際のコーピングとして機能することが示唆された (Figure 6, Figure 7)。ストレス・コーピングの観点から、保育者養成校の教員が学生の適性感や効力感を向上させることの教育的意義が示された。

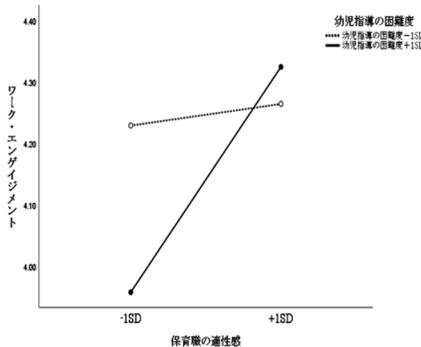


Figure 6 ワーク・エンゲイジメントに及ぼす保育職の適性感と幼児指導の困難度の交互作用

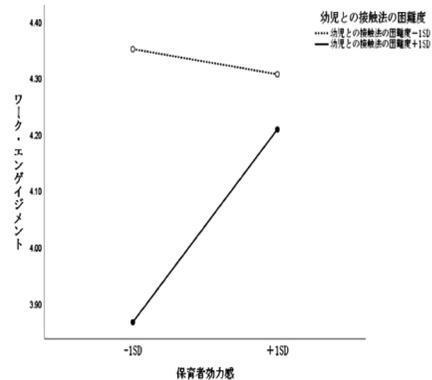


Figure 7 ワーク・エンゲイジメントに及ぼす保育者効力感と幼児との接触法の困難度の交互作用

### 3. 今後の課題

まず、研究1・2・3に共通する課題として、サンプルと研究手法の2点を指摘したい。本研究の対象者は、保育者養成系の短期大学1校から得られた限定的なデータであり、結果の一般化には慎重にならざるを得ない。保育者養成系の短期大学は、4年制大学よりもカリキュラムが過密であることから(西山・富田・田瓜, 2007)、今後はこうした大学間の相違も考慮して検討することが課題となろう。今後も検証を重ねる必要がある。また本研究は質問紙法であり、学生の自己評定から得られた認知変数を扱っているため、データには評定者の反応バイアスが加わっている可能性がある。そのため、今後は客観的な行動指標や観察評定を用いることが必要であろう。

次に、研究1と研究2の課題として、本研究の知見を糸口とした介入研究への展開の必要性が挙げられる。本研究より、簡易型MTや地域連携授業の効果を高めるうえで、とりわけ利用価値の向上をねらいとする授業を事前に行うことの有効性が示唆された。現在、利用価値を促進させる介入研究が蓄積されており(Harackiewicz, Tibbetts, Canning, & Hyde, 2014)、これらの実践例を参考にしながら介入プログラムを考案することが有効であろう。さらに交互作用の結果から、研究1では「個別志向・互惠懸念とコスト」および「協同効用と利用価値」の組み合わせ、研究2では「個別志向・互惠懸念/協同効用と努力コスト」および「協同効用と機会コスト」の組み合わせにより、学習効果が比較的大きく変化することが示された。今後、こうした協同作業認識と課題価値の「適合性の良さ」を考慮に踏まえ、個に応じた介入研究の効果を検証することが重要な課題であろう。

最後に研究3の課題として、職務動機づけの概念から派生したJD-Rモデルを、実習のモデルとして適用できるように改善していくことが挙げられる。金子(2017)および研究3では、既存のJD-Rモデ

ルの枠組みを用いて、保育実習生の動機づけプロセスを明らかにしようと試みられた。ただし、実習生は実際の職務を担う職業人の立場と、学生の身分が保障された学習者の立場の二面性を有しているため、現職者とは職務に対する認識（使命感や責任の自覚など）や置かれた社会的立場が異なると考えられる。したがって、今後は既存のJD-Rモデルを参考としながらも、現職者とは異なる実習生の特徴をモデルに反映させることで、教育現場での有用性が高いモデルへ改善していくことが課題と言える。

#### 4. 本年度の主な業績一覧

- 金子智昭（2020）保育学生におけるマイクロティーチングの学習効果に及ぼす協同作業認識と課題価値の影響—相互作用および個別学習との比較に着目して— 応用教育心理学研究, 37. 印刷中
- 金子智昭（2020）保育実習生のワーク・エンゲイジメントに関する研究—学年差を踏まえたJD-Rモデルの検討— 応用教育心理学研究 印刷中
- 金子智昭（2020）保育者養成校における地域連携授業の学習効果に及ぼす協同作業認識と課題価値の影響—相互作用に着目して— 哲学, 145 印刷中
- 金子智昭（2019）保育実習生のワーク・エンゲイジメントに関する研究—JD-Rモデルに基づくコーピング仮説の検証— 日本教育心理学会第61回総会発表論文集, 396.
- 金子智栄子・金子智昭・清水優菜（2019）保育者養成校でのマイクロティーチングに関する研究（1）—協同作業認識が保育技術を媒介として保育者の力量に影響を与えるプロセスの検討— 日本教育心理学会第61回総会発表論文集, 424.

#### 引用文献

- Aiken, L. S., & West, S. G. (1991) *Multiple regression: Testing and interpreting interaction*. Thousand Oaks, CA: SAGE Publications.
- Bakker, A. B., Hakanen, J. J., Demerouti, E., & Xanthopoulou, D. (2007). Job resource boost work engagement, particularly when job demands are high. *Journal of Educational Psychology, 99*, 274–284.
- Harackiewicz, J. M., Tibbetts, Y., Canning, E., & Hyde, J. S. (2014) Harnessing values to promote motivation in education. In S. A. Karabenick, & T. C. Urdan (Eds.) *Advances in motivation and achievement* (Vol. 18). *Motivational Interventions* (pp. 71–106.). Bingley: Emerald Group Publishing.
- 保育教諭養成課程研究会（2015）幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイド—質の高い教育・保育の実現のために— <http://www.youseikatei.com/pdf/20150609.pdf>（2019年11月11日）
- 金子（2017）保育者志望学生の幼稚園教育実習を通じた心理的プロセス—実習形態及び学年差に着目したJD-Rモデルの検証— 日本教育心理学会第59回総会発表論文集, 424.
- 文部科学省（2016）平成27年度開かれた大学づくりに関する調査研究【調査報告書】 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/ikusei/chousa/\\_jcsFiles/afieldfile/2016/11/22/1377544\\_001\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/chousa/_jcsFiles/afieldfile/2016/11/22/1377544_001_1.pdf)（2019年11月11日）
- 西山修・富田昌平・田爪宏二（2007）保育者養成校に通う学生のアイデンティティと職業認知の構造 発達心理学研究, 18, 196–205.
- 全国保育士養成協議会（2014）保育者の専門性についての調査—養成課程から現場へとつながる保育者の専門性の育ちのプロセスと専門性向上のための取り組み—